"OHP，簡易LLによるSpeaking，Hearing指導"
——理論と実践——

足利市立第一中学校　駒　場　貞　夫

〔は　じ　め　に〕

Situationやcontextを伴わないpattern practiceは，単なる機械的な練習に過ぎず効果の低いものである。聞いてわかるような英語を生徒に話させるためには，明確な英語を十分に聞かせてやらなければならない。

以上2つのことを前提として，生徒の実態を考察しながら，speaking，hearingの指導のあり方を考えてみた。もちろん「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の各領域ごとに調和のとれた指導が大切であるが，speaking，hearingは言語活動の本質であり，これを習得しなければ言語をmaster したとは言えない。そう言う意味で，視聴覚機器を使用したspeaking，hearing指導の実践例をあげて諸氏のご指導を仰ぎ，私自身の今後のteaching procedure確立のために役だてたいと思う。

なおここにあげた実践例の対象は，本校2年生の能力別編成上位クラス（2学級を上下の2つに編成）である。

〔1単位時間への機器の位置づけ〕

視聴覚機器と言っても大げさなものではなく，over head projector（Elmo 600W)と簡易LL（Tokyo English Center）である。この両者の特性を極めたうえで次のように1単位時間の指導過程に位置づけた。以下，hearing，speakingを強化するため，どの段階で，どんな方法で実践したかを述べてみたい。

1 Review	• reading • pattern practice	（簡易LL） （OHP）
2 Presentation of the new material	• pattern practice • oral introduction	（OHP） （OHP）
3 Reading	• listening to the tape	（簡易LL）
4 Consolidation	• writing • test	（OHP） （OHP）

〔OHPの例〕

i）　新文型導入

分詞の後置修飾（New Prince Readers，2，Lesson 18　§3）

Picture Aの映像（situation）を投影し，教師⇄生徒のdialogueから始める。（図1）

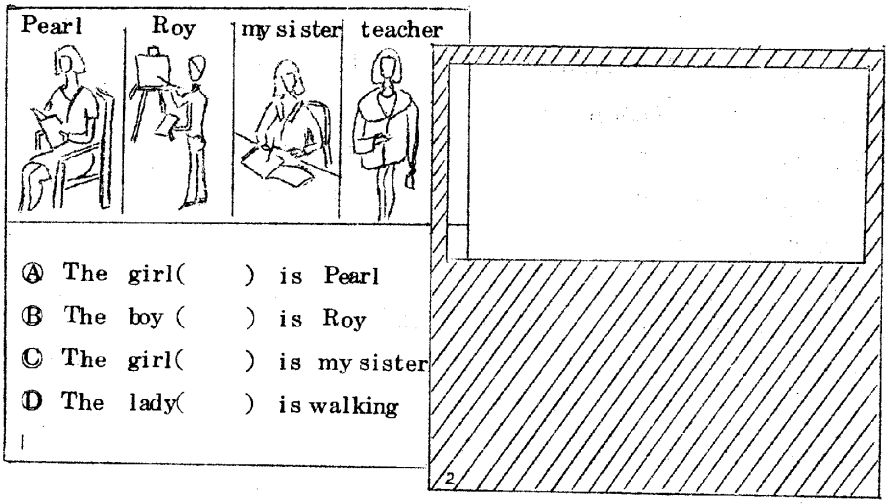


図 1

T:Now look at the picture A on the screen. Is this girl Jane ?

P:No, she isn't.

T:Who is she ?

P:She is Pearl.

T:Is she sitting or standing ?

P:She is sitting.

T:What is she reading ?

P:She is reading a book.

T:Yes. The girl is Pearl. She is reading a book.

（数回くりかえす …… ）そしてNow this time, listen to me carefully.

The girl is Pearl. She is reading a book.

↓

The girl reading a book is Pearl. を導入し，

このような調子でmim—mem→oral drillへと発展し，順にpicture Dまで新文型に基づいたoral work をする。Pic. B　The boy drowing a picture is Roy.

Pic. C　The girl writing a letter is my sister.

Pic. D　The lady wearing a coat is walking.

Pic.Aの導入により生徒が新文型を確認した後すぐにpattern practice を行うのも１つの方法であるが，憶えていない文を変形することは困難である。すなわち１つの映像から類推により発展した頭の中に描いた映像を口頭で発話できるまでの時間に生徒の能力差が現われてくる。口頭練習はじっくり考えて作業するべきでなく，スピードは無視できない。

Pic.Aというsituationを与え，それに対応する導入の後にそれを更に深める意味でPic.Bのsituationに移動し，それに対応する表現に慣れさせ，Pic.C, Dと移動するにしたがって，speakingへと発展させる。いわゆるchart drill式のtrans parencyを投影するのである。（本来chartの絵は英文を引きだすための刺激にすぎないが，Pic.Dは本時の内容と関連づけてみた）この場合，situ—

ation の移動は one step change の substitution ではないが，生徒は映像を通して視覚により stractual meaning を自然にかつ帰納的には握できないか。

このようにして再度Pic.Aに逆り，variation → selection へと pattern practiceを行なう。selection の場合，questions and answers の作業によって，Pic.A～D が利用され，内容的にも変化がある stimulus，response が展開されるのである。

視覚がいかに理解を助けるかを実験してみた（1年生対象）。

Roy likes apples better than tomatos. He likes peaches better than apples. What does he like best？ A という class には聞かせるだけで解答を求め，B という class には，apple，tomato，peach が at randomに並べてある絵を見せて聞かせる。そして答えられる生徒の数を比較すると，B の方が圧倒的に多いのである。

しかしHearing や speaking は，実生活のうえでは，いつも情景を通して行われるとは限らないので，この場合の pattern practice も視覚的映像から次第にはなれ頭の中の映像へと移行させるのである。したがって教師が与える絵が多ければ多いほどいいと言うものではなく，生徒の能力に応じて精選されたものという映像提示の原則らしきものが定まりはしないか。

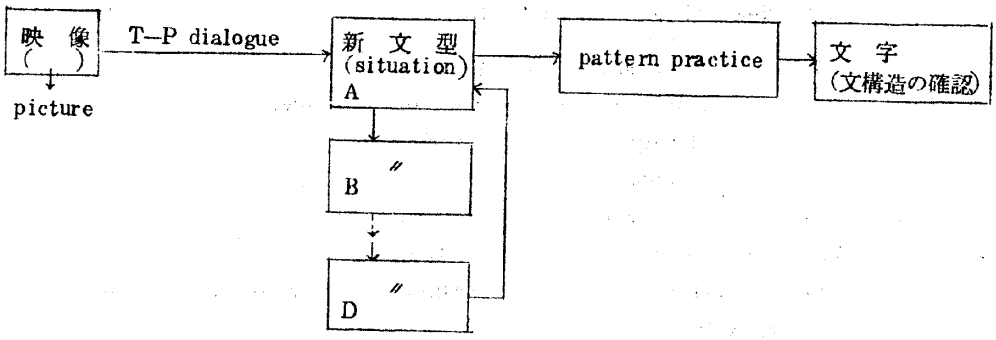
Pattern practice の後に，文字のうえからの確認を行う。(図1) trunsparency のかぶせ（不透明の部分）をはずし，sentence structure を文字を通して明確にするのである。すなわち，The girl reading a book is Pearl. の文は後置修飾のため複雑に見えても，The girl (　　) is Pearl. で提示することにより，(　　)の部分は文の主要素でなく，sentence structure としては極めて簡単なものであることを既習の基本文型を通しては握できるのである。

picture A	picture B	picture C	picture D
Ⓐ The girl (　　) is Pearl.			
Ⓑ The boy (　　) is Roy.			
Ⓒ The girl (　　) is my sister.			
Ⓓ The lady (　　) is walking.			

reading a book
drowing a picture
writing a letter
wearing a coat

図 2

ここで新文型導入の step を要約すると，視覚により映像を確認し，T⇄P dialogue を通して新文型を知り，mim−mem し次に chart を行う。次に pattern practice により aurul−oral drill をし最後に文字を通して文構造を理解する。この間，生徒の hearing，speaking の chance は極めて多く，時間の労費も少ない。



ここで私が従来やってきた導入法を反省してみたいと思う。教材は，wall picture にするか，1枚の絵にするか，教室の生徒にするか，とにかく適当と思うものを使い，The boy is Yamada. He is studying English. をT⇄P dialoguue で引きだし，この2つの単文を理解させ，1文に結びつける問題を提起し関心を高めながらThe boy studying English is Yamada. を引きだし，mim–mem →暗誦→ substitution → conversion → expansion→ selection へと発展する。はたして，生徒の中には頭の中の映像の変化に追いつけないものはいないか，生徒の発話はspeedyか，sentence structure が途中でくずれるものはいないか，oral workは機械的でないか，集中力はどうか……このような問題を防ぐ意味からも，mim–mem の直後に新文型を板書する。生徒はもう黒板から目がはなれないのである。

このような点を反省してみて，短時間でHearing，speakingの作業に集中させ，発話のchanceを多く与えたいという気持ちで試みたものがＯＨＰによる新文型指導である。高学年に進むにつれて，文型も複雑になるし，situationが明示された確かな基盤がないと，練習しても効率の低いものになりがちであり，その場限りに終わってしまい，自然に直感的に言語を運用する力とはならないからである。

ii）　Oral introduction

一般に高学年（2，3年）になるにしたがい，hearing，speakingは低調になり読解に重点を置いた授業になりがちである。それは教材が高度になるにつれて生徒の負担が重くなること，変化に乏しいpattern practiceにあきること，心身の発達に伴う発言力の低下等いろいろあると思うが，教師の態度が読解中心に傾けば生徒の学習態度もそのような傾向になるだろうし，oral mastery を重視する授業をすれば生徒はその方向へ進むものだと思う。要するに教師の考え方が実用主義を強く打ちだすか単に教養主義でいいとするかにより，生徒はどちらにでもなるということである。ここで前者の立場でhearing，speakingの力を強化するためには，新語，句，文の発音などは可能な範囲でcontext の中で spoken Englishを通して導入することが自然であり効果的であるし，新教材導入もOral Method で用いられる oral introductionの効果を無視することはできない。しかし教科書の低学年（1，2年）の教材程度では，easy English に直すことはほとんど不可能に近いともいわれている。だが2年の後半ごろからは文型も複雑になり，内容も深みを増してくるし，生徒の語い力も定着してくるので oral introduction を活用する意味は大きいと思う。次に示すのは，ＯＨＰによる映像のかぶせや重ねを利用しながら行なった oral introdaction の例である。

教科書本文(New Prince Readers, 2, Lesson 18 §3)

Pearl: Do you have much snow here?
Mary: Yes, we do. We sometimes have a lot of snow.
You may feel very cold in New York.
Pearl: How about spring?
Mary: It's sometimes very cold and sometimes very warm.
You often see strange scenes on the streets.
People wearing fur coats are walking together with people wearing summer suits.
Pearl: How interesting!
Mary: Summer in New York is very hot.
Fall is the best season here.

(Oral Introduction)

1 How many seasons are there in a year?
2 What are they?
3 Is summer the hottest season?
4 What is the coldest season?

.....

Well, boys and girls, I'm going to tell you about four seasons in New York. After that I'll ask you some questions, so listen to me carefully.

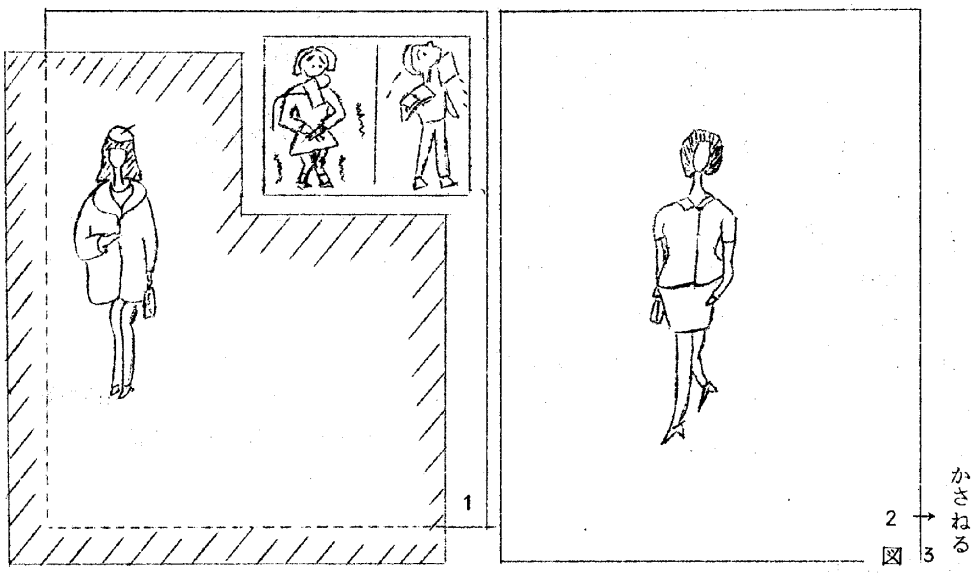
In winter they have much snow in New York. If you go to New York in winter, yo'll feel very cold.

Summer in New York is very hot. And fall is the best season. But spring in New York is very interesting. Because, in spring, it's sometimes very cold and sometimes very warm.

If you go to New York in spring, you'll see very strange scenes. For example ( ), you'll see people wearing fur coats. At the same time you'll see people wearing summer suits. They are walking together on the street.

(Questions)

1 Do they have much rain in winter in New York?
2 What do they have in winter in New York?
3 Is it very hot in summer in New York?
4 What is the vest season in New York?
5 How about spring?
6 If you go to New York in spring, Can you see people wearing fur coats?
7 Can you see people wearing summer suits, too?
8 .....



図

まず context の中で新語(under-lineの語)を指導し，本教材に関する予備的なT→Pの questions and answersを行なう。後は上記の通りである。

これはNew Yorkの四季についてのPearlとaunt Mary の対話であり，特に春の街頭での珍らしい光景が話題になっている。そのため話題の中心となる山場に生徒の注意を集めるために，OHPを図3のようなかぶせや重ねを利用しながら使ってみた。そして次に check of understanding として questions and answersを行なった。これは内容理解度の確認とspeakingの機会を与えるためである。その時必要に応じてOHPの映像を指摘してやる。生徒の反応は概して良好であった。oral introductionには生徒の関心が高いようだ。それはeasy Englishのため比較的長い文でも理解しやすいし，storyになっているためおもしろいからだろう。いちばん真剣に生徒の眼が輝く時である。

私は checkの場の生徒の responseは原則として内容の理解に重点を置くためshort answerでいいことにしている。(能力に応じて long answerを求める場合もあるが，reading段階の checkでは，long answer を要求している)。また最近のtextには対話形式の教材が多いので(良い傾向だと思う)例のように適当に立場を代えて提示することもある。それは学習者にとって，特定の英語がどのspeakerの発話であるか判断しにくいからである。

OHPの導入はstory を聴覚によってだけでなく視覚の助けをかりて理解をはやめる1つの手段に過ぎない。この点では理論的には，OHPに限らず，wall picture でも，きり絵でも，実物の設定でも同じことであるが，授業に活用しやすいという点ではOHPが有力であると思う。その特性をみると

1. 時間の浪費を防ぎ smooth に授業が展開する
2. screenに集注するため，situationを理解しやすい
3. transparenciesの重ね，削除，かぶせ等により situation の変化が多種多様である。

2については，聴きとった内容に対して生徒の自由な場面想像を1つの枠(ワク)に制御してしまうという欠点があるので，提示する絵も慎重に選ばなければならない。

Transparencyに描かれる絵は，（pattern practiceの場合は，機能語等の関係で，ある程度定まってしまうが），想像力が豊かでしかも絵に堪能な教師であれば生徒が喜びそうなものを与えてやれるのだが，私は教科書の挿し絵，chart,指導書等から収集している。Oral introductionでの効果的な映像提示の方法は，storyの流れに従って順にcueとなる絵を積み重ねながら最後に1つの情景に完成させることである。もし途中で急に全く別の情景に入れ代った場合，積みあげられたimageは断絶してしまうからである。また教材によっては，storyが非常に動的なものもあるわけだから，その場合は場面の変化が激しいので，ロール式のtransparencyを使用し，場面ごとにずらしていくことによりimageを継続させると効果的であると思う。

ＯＨＰを使い始めてまだ日が浅いのだが，pattern practice にしても新教材導入にしても，映像を提示することにより中間以下の生徒の活動が非常に活発になってきた。これは単に生徒の好奇心とも思えない。視覚機器により与えられた具体的な基礎が学習の深さや多様性へと発展するからであるといえよう。

〔簡易ＬＬの例〕

Pattern practiceやquestions and answers等のoral workを一層強化するのがoral readingである。oral workだけでは音声の指導は不十分である。reading指導では，oral work で習得した言語を文字を媒体として音声を伴って読む作業をし，さらに確実なものにする。そのためには，まず正しい音声を聞かせることから出発する。

本校で使用しているＬＬは，audio-passive型でearphone で聴取させるだけの装置である。oral introductionの段階で本文の内容を理解し，reading 指導にはいるわけだが，ここにＬＬ学習を組み入れる。生徒が音読する場合のmodelとして，native speakerによるtape（TDK. Language Tape. 中学英語学習テープ，教科書準拠）を使用している。内容構成は次の通りである。

種　　類	内容とねらい
1 Mim-mem practice	教材中の新文型の模倣と反復
2 Pronunciation practice	新出語句の模倣と反復
3 Listening comprehension practice	reading materialそのもの，内容は握
4 Reading practice	reading materialのpauseつき

Tapeによるreading指導のねらいは，内容理解のうえにたって,正しい発音，強勢，音調，休止，速度を習得することである。これは私たち教師のreading abilityだけでは残念ながら全てを満たすわけにはいかない。日本人教師だけで指導をすると，生徒は教師の英語はわかるがnative speaker の英語は理解できないということにもなりかねない。

簡易ＬＬを利用するねらいは，（ＡＰ型ＬＬでは，音声を生徒に伝達するだけであるから，tape-recorderをopen playで聴取させるのと変りないわけだが全生徒がearphoneを使用することにより）

1. air gapがなくなり全生徒が同質の音声と音量を聴取できる。

2. tapeの音以外の雑音から遮断され注意力が高まる。

3. microphoneを通じて発音がまぎらわしい語など音節に分けて指導することができる。

4. 必要に応じquick stopperを使ったりrewindすることによりdrill数の不足を補うことができる。

以上の利点を高く評価したからである。特に英語を習い初めて間もない1年生で，前列と後列の生徒の発音には，air gapの影響で大きな差を生ずることがよくある。

ＬＬ教材は単に聞かせれば効率があがるものではない。ポイントをおさえた指導が大切である。そのポイントとは，前記の発音，強勢，音調，休止，速度である。一般には，「生徒のreadingの中で音調や強勢などに文全体の意味の理解が十分に示されていないときには，それを決して見過してはならない」といわれている。たしかに音調，強勢は全体の文意を理解するのに重要な要素をもっているが，発音，休止，速度も重視されねばならない。しかし1単位時間の中のreadingの指導の中で，このポイント全てにわたり注意させて効果があがるだろうか。そこで私は，消極的な方法であるが，1単位時間で，その教材の内容上特に重要なもののいくつかにしぼり，他は毎時の積み重ねにより少しずつ自然に慣れさせるよう努めている。発音指導については，私はreadingではきびしく，speakingではあまりきびしさを要求しないようにしている。決して発音に限ったわけではないが，T↔Pの対話でもP↔Pの対話にしても，教師が音声について神経質過ぎると，生徒はいつの間にか話すことをいやがるようになるからである。案外こんな点でも積極的なspeakingの向上を阻むものがなかっただろうか。日本人であるからにはいかに努力してもnative speakerと同等あるいはそれ以上は期待できない。したがって発音については，教師も生徒もあまりあせらず，その分，運用面で多くを生かした方が得策であると考えるのだがどうであろうか。

教科書準拠のtape以外のhearing，speaking教材として，2年上位クラスには第2学期より週1回（15分程度）「ヒアリング演習・English Study」（シート付，学研書籍，ELEC）を使用している。これは各Topicが全て対話形式になっており，Topicごとにpattern practiceができるようになっている。1年程度の教材でありspoken Englishを指導するのに効果的である。ＡＢ２者の対話シートから，一方のspeakerの発話を削除したテープを作り，P↔tape dialogueを行わせるのである。そして両者のrythmがうまくかみ合うようなdillをするのである。また本校にはＴＥＣのテープ（pattern practiceが主，教科書準拠）も備えてあるが，rapidnessやpauseなどの点で本校の実態に即さない面が多分にあり今のところ1，2年では使用していない。

以上hearingやreading指導にあたっての実状なり考えを述べてみたわけだが，本校で簡易ＬＬを使ってみて言えることは，（客観的な記録はないのだが）生徒の発音がていねいになり，stressやintonationを意識しながら読むようになった生徒が徐々にではあるがふえてきたということである。

〔今後の課題〕

極めて断片的になってしまったが，speaking，hearingを強化するために，どこで，どのように機器を利用して指導してきたかを述べてみたつもりである。しかし多くの問題が残るのである。

まず年間指導計画への位置づけである。本校では週2単位時間機器利用が可能であるが，機器を使用することにより効果があがるとわかっていても，自分の機器使用時間と必ずしもかみ合わない。2単

位時間を２日間連続して機器を使用しないと，softwareが次時の復習に活用できない。また，Lesson Exercisesやgeneral review でどのように機器を活用すべきか，ＬＬの機能を生かすためには音読指導だけでいいのか，もう１つの特性であるpattern practiceとしての活用のあり方，普通学級での個別指導のための自作テープ作成の工夫，hardware である簡易ＬＬが少しもhardでなく貧弱で故障が多いこと。ＯＨＰについても，略画の工夫，文字の大きさ，screen上下部のピンボケ，資料の保管。また機器使用についての評価の問題……いずれ解決されなければならない問題が山積しているのである。

多くの知識を限られた期間内に認識させたり習得させるために，ますます教育機器は活用されるだろうが，教師は，資料の収集や整理に追われ，授業では，ただ機械操作と資料提供者であるということでも困る。tapeは市販されているもの以外からnative speakerの音声は求め難いし，transparenciesにしても既製のものが市販されはじめているからには，多いにそれらを利用すべきであると思う。しかし，枠（ワク）にはまっている教材ばかり提供していたのでは，本当に教師対生徒の血の通った教育活動は展開しない。教師の仕事と機器の限界もいずれ解明されそうな気がする。

評

視聴覚教具の利用は，授業の能率化・能力差に応ずる指導・生徒の能力の客観的は握などにおいて，非常に効果的であると思います。両先生の研究は，確固たる指導理論に立脚した，文字どおりの実践結果の発表であるだけに，尊いものです。特にＯＨＰ・テープレコーダー（簡易ＬＬ）の二つについて，経験からわりだした利用法がまとめてありますが，これらは，このみちの一種の参考書として私たち英語教師に大変利用価値のある記録であると思います。ご指摘のように，機器はその特性をふまえたうえで活用いたしますと，学習者の意欲醸成に資するばかりでなく，復習・導入に，整理に評価にと，living assistantとしての威力を発揮してくれます。現に，両先生のご授業では，じゅうぶんにこれがなされています。Hearing・Speakingの面では，能力の低い生徒でもかなりついてくるものだとはよくいわれていますが，私たちはとかく高学年になるに従って，この面をおろそかにしがちであり，結局は，落伍者を多く出してしまうことがよくあります。このとき，これらのご熱意に満ちた輝かしい実践記録は，広く地域の英語教育に新風を吹き込むものとして，貴重なものであり，心から御労苦に感謝いたします。